

# 川嶋所長、山上の光賞 受賞

## 第1回「山上の光賞」受賞によせて

看護という仕事は、誰もが生まれて生きて本当によかった生を全うできるよう支援する専門職と信じ、そのためには、人々から愛され頼りにされる存在でありたいと願っています。その一方で、この職業始まって以来、必ずしも恵まれた環境におかれてこなかった歴史が、今なお続いていることにも関心を向けながら64年、未だに現役をさせて頂く幸せを感謝しつつ壇上に上がりました。戦後の看護史の多くのできごとや時々の看護界のことを肌で感じながら歩いて来たプロセスを一言で言うなら、日々変化に富んでいたと言うことになりましょうか。幼い病児の死に向き合う若い母親と抱き合っただけ涙し、医学的に絶望的だった患者が回復した喜びに立ちあい、看護師ならではの悲喜こもごもを数多く体験しました。

長く続けて来られた要因は、笑ったり怒ったりしながら暮らしに変化を与え続けた家族の存在を抜きにはできません。普通の感覚から見たら非常識と言われるような共働き50年でしたが、被害者意識ではなく何時でも能動的に対処するやり方、看護をはじめ色々なことに向かう姿勢にも運動した気がしています。だから、困難があればあるほどファイトが沸く習性は、今も変わりません。

みなさまもお気づきのように、昨今の医療現場は医学の高度化が進んだ結果、医師も看護師も、五感を用いた観察や治療の方法から遠ざかり、モニターやデジタルデータに依存する風潮がますます強まっています。このことに気づき、約10年前から看護師の手の有用性の研究を重ね、手を用いたケアの実践によって自然の回復過程を整える看護本来のあり方に回帰することを提言し続けていますが、賛同者はいても実践者は未だ未だ。「て・あーて」とは手とアートを繋いだ造語です。世界中の人々がスキンハンガーと言われる今だから、惜しみなく手を用いたケアを広めようということで、「夢は語ることで叶う」ということを信じて、可能な限りこれからも新しい夢の実現のためにチャレンジしたいと願っているところです。沢山の方々から祝福され、長く生きてよかったを実感した日でした。ありがとうございました。(2015年5月12日)



